

臨時受付嬢の恋愛事情

君のテリトリー

臨時受付嬢の恋愛事情

目次

臨時受付嬢の恋愛事情

「申し訳ありませんでした！」

私は猛然と頭を下げた。

「大丈夫ですよ。そんなに気にしないでください」

私の勢いに驚いたのか、頭上から、少し慌てた様子の声が降ってきた。

気にしないでって言われても……。あんな情けないところを見られて、気にせずにいられる女の子なんていないとと思う。ヒーターのコードに足を引っ掛け、転ぶだけでも恥ずかしいのに！ よりによつてお客様の前で！ それも盛大にスカートを破くなんて！ したたかに打った膝も痛いけど、それより何より心が痛いです。いいえ。痛いのではなく、恥ずかしすぎて灰になつてしまいそうです。

「ですが……」

さらに言い募ろうとすると、苦笑混じりの声が遮^のつた。

「とにかく、顔を上げてください。ね？」

私のドジを笑いも呆れもせず、優しく手を差し伸べて上着を貸してくれた彼。その彼から、乞う

ように——だけど有無を言わせぬ強い口調でそう言われては、これ以上頭を下げっぱなしにしていられない。私は唇を噛みしめながら、そつと体を起こした。

火が出るんじゃないかつていうぐらい顔が熱い。おそらく茹^ゆでたタコみたいに真つ赤になつているはず。ますますいたたまれない。ああ、穴があつたら入りたい。むしろ穴を掘つて潜りたい。

恐る恐る見上げると、そこには苦笑いを浮かべた精悍な彼の顔があつた。恥ずかしくもあり、申し訳なくもあり、視線をまともに合わせられない。

「あなたに怪我^{けが}がなくて良かった」

真つ赤になつている私を哀れに思ったのか、彼はにつこり笑つて慰^{なぐさ}めてくれる。その笑顔はとにかく眩しいぐらいに素敵で、自分の失態も忘れて見惚^{みと}れてしまった。社内の女の子たちが騒ぐ理由がよく分かる。

半分上の空で借りた上着を返すと、彼はそれを優しく受け取り、流れるような動作で羽織つた。その仕草がまた映画俳優のように決まっていて、さらに見惚れてしまう。

「え!? あ！ あの！」

私が呆けて口をつぐんだのを落ち着いたと勘違いしたのか、彼は軽く会釈し、踵^{きびす}を返して去つていく。

声をかけなきやと思つたけれど、一体何を言えばいいのか……。悩んでいるうちに、彼は階上へと消えていった。

私は誰もいなくなつた階段をぼんやり見つめながら、胸に湧く得体のしれない気持ちを持て余してゐた。彼の怜憐な視線と、安心を誘う笑顔とが、交互に頭をめぐる。

——館花さんつて、どんな人なのだろう？ 優しい人なの？ それとも直感通りに……？

これが、私、佐々木雪乃と、営業企画部のエース館花和司さんとの物語の始まりだつた。

受付カウンターの裏にある時計が、ピピッと小さな音を立てて正午を告げた。

私は足元の棚から『休憩中』のプレートを出し、内線電話の隣にちょこんと置く。受付嬢である私の留守中にお客様がいらした場合、この内線電話で総務部へ連絡してもらう。総務部には昼休みでも誰かしら残つてゐるから、これで支障はないはず。

カウンターを出て、正面から位置をチェック。正面玄関を入つてきたお客様から見て、プレートは見やすいか、電話は手に取りやすいか。

「うん。大丈夫かな」

声に出して確認し、足元に置いておいたミニバッグをとつて、受付奥の更衣室兼休憩室へ向かつた。小さなテーブルと折りたたみ椅子が二脚、そしてステンレス製の無機質なグレーのロッカーが三つほど設置してあるそこは、さほど広くもないが狭くもない。

慣れない受付業務も、これで半日終了。私は深々とため息をついた。疲れた。

折りたたみ椅子を引き出し、どつかり腰をおろしてテーブルに突つ伏す。

「吉成さんと加瀬さんつて凄いなあ」

いつも受付をやつている二人の名前を、私はつぶやく。

毎日あんないたくさんの方と笑顔で接して、そのうえテキパキ捌いて。それに比べて私は……

「あうー」

さつきの失敗を思い出し、恥ずかしさのあまり、テーブルに埋まりたくなつた。

そもそも事の発端は……

今朝、私はいつも通り始業四十分前に出社して更衣室に直行した。女子社員の多くは始業時刻ギリギリに出社するので、更衣室はまだ大して混雑していなかつた。のびのびと着替えて、エレベーターで三階の総務部フロアへ。そこが私の職場なのだ。

エレベーターホールの時計を見ると、八時三十分だった。うん。これもいつも通り。

「おはよーございまーす」

少し重いドアを押し開けながら、暢気^{のんき}に朝の挨拶をした。

「はよー」

「うーす」

「おはよー」

早めに出社した社員があちこちから返事をしてくれた。それに軽く応えながら、自分の席に座——
「ごめん。佐々木さん。ちよつと……」
——れなかつた。

声を掛けてきたのは私の直属の上司、飯沼課長。何か困ったように眉尻を下げている。

嫌みのない風貌と、それに見合った穏やかな性格。他部署の女子社員からも羨ましがられるくらい良い上司だ。優しいだけじゃなくて、判断は早いし、指示は的確だし、ここぞという時は一歩も引かない頼れるお方だ。唯一の欠点は、愛妻家過ぎるということ、くらいかな？

「課長、何か？」

課長の席に歩み寄りながら、私は何かまずいことが起きたのだろうと見当をつけた。というか、正直に言うと、私が何かミスをやらかしたに違いないと思ったので、注意を受ける覚悟を決めた。

「佐々木さん、朝からごめんね？」

「私、何か……」

「あ、違う違う」

飯沼課長が笑つて否定してくれたので、ちょっとほつとした。でも私のミスじゃないなら、何だろう？

「受付の吉成さんと加瀬さんがね、インフルエンザに罹つたらしい。悪いけど今日から三、四日、受付代理をお願いします」

「え!? あ、はい！」

「じゃあ、よろしく頼みます。何かあつたら私に連絡を入れてください」

「はい！」

急いで自分の席に引き返し、両隣と向かいの席の同僚に声を掛けた。三人とも私より早く出社して

ていたし、事情もすでに知っていたのだろう。フォローするから頑張つておいでと優しく送り出してくれた。

受付業務をしている間、当然自分の業務は滞る。いくらみんながフォローしてくれると言つても、今日はきっと残業確定。……つていうか、これから数日はそうだと思う。

けど、みんなの心遣いが嬉しかったので、私は元気に総務部を後にした。

「じゃ、行つてしまーす！」

受付は、私が所属する総務部総務課の担当業務だ。受付嬢の一人が体調不良で休んでも業務に支障のないよう、二人配置されている。吉成さんと加瀬さんだ。

が。万が一、両名とも出社できなくなつた場合は、総務課の者が代理を行うことになつていて。総務課なら誰でも良いのだけれど、やはり受付は女性社員の方が望ましい、ということでピンチヒッター筆頭は、吉成さんと加瀬さん以外の唯一の女子社員、つまり私だ。総務課に配属された当初、前任者からそういう引き継ぎをされたし、受付の業務内容についても一通り説明を受けている。けれど、この課に配属されてから初めて回つてきた役だ。いつかこういう日が来るとは思つていたけど、やっぱり緊張する。

複数ある応接室の机を拭いて、観葉植物に水をやつて、今日のアポイント予定表を確認して……。あ！ お客様にお出しする飲み物の用意を忘れていた！ なんてバタバタしているうちに、あつという間に始業時間。

ほどなく、ぱつりぱつりと来客が訪れ、十時を過ぎる頃には手に余るほど忙しくなった。そして、ようやく一段落ついた頃。

「すみません。はかまた阿部と申しますが、営業企画部の館花さんをお願いします」

紺色のスーツに身を包んだ男性が、早口で取り次ぎを頼んできた。

「いらっしゃいませ。営業企画部の館花ですね？」

私はマニュアル通りの受け答えをして、少し緊張しながら館花さん直通の内線電話をかけた。

営業企画部の館花さんは、一言で言うと社内の有名人だ。有能で、優しくて、外見もとびきり格好良い。三拍子揃っているのだから、女子社員は黙っていない。昼休みや終業後など、館花さんが女子社員に囲まれているのをよく見かける。

確かに素敵な人だと思う。そこに館花さんがいるだけで、つい目で追ってしまう。でもそれはあくまで鑑賞対象として、だ。みんなのように彼と親しくなりたいとは思わない。

私の姿は十人並みだ。仕事だってできるとは言えないし、決して目立つタイプじゃない。例えば合コンをしたとして、男性陣から真っ先に存在を忘れられてしまうメンバー……それが私だ。そんな冴えない女を、彼のように華やかな人が相手にしてくれる？ 身の程知らずに近づいたって、鼻で笑われるのがオチだ。傷つくくらいなら、遠くから眺めていた方がいい。

それにね。実は彼のことが怖かつたりする。彼の綺麗な顔から表情が消えると、人を寄せ付けない雰囲気になる。普段は穏やかに笑っているけど、その下に氷のように冷たい顔が隠れているかと思うと……それがもし自分に向けられたらと思うと……怖気づいてしまって、話しかけることすら

できない。

そして何よりも、あのすべてを見透かすような眼差しが怖い。彼に見つめられただけで、自分の見たくない部分や見せたくない部分を暴かれてしまう気がして、逃げ出したいくなる。

今まで何度も事務的な会話をしたことはあるけれど、上手くできた試しがない。私がもう少し経験豊富だつたら、緊張も恐怖心もすべて押し殺して、普通に会話ができるのかもしれない。けれど、今私のには無理だ。彼とつなく世間話をする自分なんて想像もつかない！

受話器を握る手にぎゅっと力を込めた。もうすぐあの涼やかで落ち着いた声が聞こえてくるはずだ。緊張と恐怖とほんのわずかな期待に身構えただけれど、予想に反して呼び出し音が延々と続く。席にいなかな？ と不安になつた頃、やつと繋がつた。

『はい！ 営業企画部！』

慌ただしい応答が聞こえてきた。あれ？ この声、館花さんじや……ない？

「あ、あの。受付の佐々木です。館花さんは……？」

『あれ？ 佐々木さんって総務部の？ 今日は受付？ ヘえ大変だね。……つと。館花はミーティングが長引いていて、まだ席に戻つてないけど……ああ。来た来た。いま館花に代わるから、ちょっと待つて』

声の止んだ受話器の向こうから、営業企画部のざわめき……もとい、怒号どごうが聞こえてくる。ああ、そういえば、もうすぐ展示会があるから営業部門は修羅場しゆらばなのだ。受話器越しにも、殺気のようなものが伝わってきて、充分に恐ろしい。

『……お待たせしました、館花です。お客様は先に応接室にお通してください。予約は……』

「はい。入っています」

『あれ？ 佐々木さん？ ……そうか、今日は君が受付なのですね。すぐ行きますので、よろしくお願ひします』

そう言われて、どきりとした。どうして声だけで私って分かったのだろう？ 訝しんでいる間に、電話は切れていた。

私は疑問を振り払つて立ち上がった。カウンターを回つて、来客の阿部様のもとへ向かう——はずだったのだけれど。

「きや！」

足に何か細いものが引っ掛けた。バランスを崩した。体勢を立て直す間もなく、体がかしづ。掴まれるものはないかと、とっさに伸ばした手は虚しく空を掴むだけ。

転ぶ！ 痛みを覚悟して目をつぶった時、びりつという嫌な音が聞こえた。それに重なるように、背後でガシャンと何かが倒れる大きな音が響き渡る。次いで、私の膝が床に打ちつけられる鈍い音がした。

「——ツ!!」

両手をついてかるうじて上体を支えたが、膝の痛みに呻き声が漏れた。痛い。かなり痛い……。涙目になりそうだったので、まばたきでこらえた。

どうやら私は、足元に置いていたヒーターのコードに足を引っ掛けで転んだらしい。今日は電源

を入れてなかつたから、火傷や周りを焦がす心配はないけど……。ヒーターが壊れてないといいな、なんて悠長なことを思う。

「大丈夫ですか？」

その声に振り返ると、阿部様が心配そうに私を覗き込んでいた。そこで、ようやく自分の情けない格好に気がついた。

「あ！ とんだところを……。申し訳ございません」

「お怪我はありませんか？」

「ありがとうございます。おかげ様で何とも……」

痛みをこらえながら立ち上がりかけて、はつと気がついた。さつき、びりつて言わなかつたつけ？ 嫌な予感がして、さりげなくスカートの後ろの縫い目を手で探つてみる。

——やつぱり！ ちょうどお尻のあたりに盛大な裂け目が！ ど、どうしよう。これは、まずい。かなりますい。非常にまずい！

「やつぱりどこか怪我を？」

と手を差しのべられて、焦つた。

「いえ！ あの、決してそういうわけではなくて、ですね。ええと……」

スカートが破れてお尻が！ なんて言えるわけない。

彼の手を取るべきかどうか迷つていると——

「どうしました？ 随分大きな音がしましたけれど」

凛とした声が響いた。

「館花さん！」

視線が合うと、彼はすっと目を細めた。微笑みを消し、少し眉をひそめて私をじっと見るその眼差しからは、いつもの温しさが消えている。私は胸がひやりとし、硬直した。
館花さんは阿部様に向かって一礼し、私の横に片膝をついた。いきなりの急接近。しかも私の顔を覗き込んで、息が詰まつた。間近で見る彼の顔は、冷たい威圧感がある。彼のように完璧な人から見たら、私の姿はどれだけ情けなく見えているだろう。みじめな気持ちでぎゅっと目をつぶつた。

「立りますか？　どこか痛めましたか？」

叱責を覚悟していたのに、意外にも気遣わしげな柔らかい声が耳に届いた。予想していなかつた展開に驚いて顔を上げると、館花さんは優しい微笑みを浮かべている。

今しがた見たばかりの怜俐な顔とその微笑みのギャップに動搖てしまい、私はただ茫然と彼を見つめるだけだった。館花さんは答えを促すように、笑みを深くした。

急いで答えなきや！　と思うけど、なかなか言葉が見つからない。館花さんが私の目をじっと見続けているから混乱はますますひどくなる。それでなくとも言いにくうことなのだから、これ以上困らせないでほしい。

「い、いえ、怪我はしていません。ただ……。あの、その……」

私は無意識に破れたスカートをさすっていたらしい。館花さんは私の腕の動きに視線を走らせ、

納得したように軽くうなずいた。

「これを」

そう言つて彼はさつと上着を脱ぎ、私の肩に掛けてくれた。
「こちらはもういいので、あなたは業務に戻つてください」

「え？　あの、これ……」

驚いてお礼さえ言えずにいると、館花さんは微笑みながら首を横に振った。気にするな、と言うように。私は信じられない思いで彼を見つめた。胸がドキドキして苦しい。

「人が来ないうちに立ち上がりください、ね？」

彼は立ち上がりざま、私の耳元でそつとささやいた。吐息が微かに耳にかかる気がして、顔が熱くなる。無言でうなずく私にもう一度小さく笑いかけると、館花さんは阿部様を促して応接室へ向かつた。

後に残された私は何とか立ち上がって、倒れたヒーターを元に戻した。その拍子に館花さんの上着が肩から落ちそうになり、慌てて手で押さえた。私には大きすぎるその上着は、スカートの破れ目をしつかり隠してくれている。館花さんの気遣いが嬉しかつた。まともに話したこともないのに、一方的に苦手だなんて思つて悪かつたかな。次はちゃんとお礼を言って、それから謝らなくちゃ。

上着から微かに、爽やかで甘い香りがした。館花さんにぴったりの匂い。

私は胸の奥に淡く甘やかな痛みを感じた。

もうすぐ正午になるという頃、応接室から館花さんが出て来て阿部様を見送った。二人の表情を見る限り、商談は良い方向に進んだらしい。あんな大失態を見られた後なので恥ずかしいけれど、取り澄まして立ち上がり、お辞儀をした。

見送りを終えて戻つて来た館花さんに、小走りで駆け寄る。

「館花さん！」

「ああ。佐々木さん」

「上着ありがとうございました」

私は借りた上着を差し出した。

「少しはお役に立てたようで良かった」

と館花さんは言うが、どことなく怪訝な顔をしていて。何だろう？と思つて自分の姿を思ひ返してみた。

あ！腰にカーディガンを巻いて、スカートの破れを誤魔化しているんだった！場にそぐわないことこのうえない格好だ。彼に変な顔をされても仕方がない。

「あ、あの！これはですね、その！受付を無人にするわけにいかないし、もうすぐお昼だし、午前中の来客の予定はもうないので……えっと」

いや、そんな変な言い訳をするよりも、伝えなきやいけないことがあるでしょう！私は、ますます怪訝な顔をする館花さんに向かつて猛然と頭を下げた。

「申し訳ありませんでした！」

そして話は冒頭に戻るのです。

いつまでも落ち込んでいたいけど、時は無情だ。お昼休みは刻一刻と過ぎていく。

私はのろのろと立ち上がり、ロッカーを開けると、そこには予備の受付嬢用の制服が一セット入っていた。スカートを取り出して着替える。そして、またテーブルに突つ伏す。

「うー」
唸つていると、微かに振動音が聞こえた。

メール？バッグを引き寄せ、ごそごそと携帯を取り出した。メール着信ランプが点滅している。開いて確認すると、仲良しの酒井美香ちゃんからのメールだった。

『よ！受付嬢♪いい男が来たら捕まえといて。よろしく！なんてね。手伝えることとかあつたら、遠慮なく内線してね』

美香ちゃん本人は何の気なしに言つているのだろうけど、凹んでる私には何よりもよく効く薬だつた。

「ありがと」

携帯を、人差し指でこつんと突いた。

「……お弁当食べよかな」

疲れて食欲もないけど、午後の業務と残業のことを考えたら、食べる以外に選択肢はない。スカート

トを繕う時間も必要だし、早くしなきやね。

午後もまた受付業務だと思うと気が重い。けど、あれ以上に恥ずかしい失敗なんて、もうしないだろうと思う。大丈夫。きっと何とかなる。とにかく冷静に。私はそう自分に言い聞かせた。

開き直つたことが功を奏したのか、その後は何事もなく過ぎていった。

午後五時。小さな電子音が終業を告げた。

私は内線で飯沼課長に受付を終了する旨を連絡する。

やつと肩の荷が下りた気分。私は、ほうつと長いため息をついて立ち上がった。お屋と同じように、業務時間外であることを示すプレートと内線電話をカウンター上に載せる。

そのまま総務部に戻ろうと思つたけど、明日のスケジュールをもう一度確認したくて、私は再び席に座つた。

予定表を見て、明日の……特に午前中のアポイントを重点的に読み返した。大丈夫、ダブルブックイングはない。いや、あつたらまずいんだけどね。

明日こそはミスなしで、と思っていたその時……

——ぴたつ。

おでこに、ものすごく冷たい何かの感触。

「ひゃああああああ!?」

額を両手でかばいながら顔を上げると……

カウンターに肘をつき、やや身を乗り出している館花さんの姿があつた。ジュースの缶らしきものを右手に持ち、面白そうに私を見ている。

「ええ!?」

何で館花さんがいるの!? つていうか、その右手の缶！ もしかして今の衝撃はそれ!?

「やあ」

館花さんは屈託なく笑つた。こんなふうに彼から笑いかけられたことなんて初めてで、度肝を抜かれた。

「は、はあ」

我ながら何とも間の抜けた返事。だけど、どう返せばいいのか分からないのだから仕方ない。まづつたかなと思ったけれど、館花さんは気を悪くした様子もない。ただ、肩にちょっと力が入つているように見えるのは、もしかしなくても笑いを堪えているのだろうか。

「先ほどは……」

「お疲れ様でした」

また謝ろうとする私を遮り、館花さんが目の前に缶を差し出してきた。その仕草がとても自然で、私は反射的に受け取つてしまつた。

「カフェオレ……?」

「差し入れ。……もしかして温かい方が良かつたでしょうか?」

「なら良かった。さつき見かけた時、ちょっと赤い顔をしていたみたいだつたので、冷たい飲み物にしてみました」

にこりとまた笑いかけられて、一瞬聞き流しそうになつた。

けれど、さつき見かけたつて、いつ？ と不審に思つてはいるが、すぐに館花さんは察してくれた。「ああ。今うちの部署忙しいでしよう？ 残業前の買い出しに行つたんです。じゃんけんに負けちゃつて、俺が買い出し当番」と左手に提げたレジ袋を軽く持ち上げた。ああ。買い出しに出る時に受付をちらりと見たと。そういうことですか。納得。だけど……。

「でも、これをいただく理由が」

「吉成さんと加瀬さんがインフルエンザで休んでるつて、同じ部署の女の子に聞きました」

話が見えない。何と返事したらいいのか分からぬから、私は黙つてうなずいた。

「いきなりで大変だつたでしよう？ 通常なら一人でこなす仕事をあなた一人でやるわけですし」「ですが……」

確かに慣れない仕事はきつかつたけど。でも、何も一人で一人分の穴を埋めたわけじゃない。受付が担当している業務のうち、総務フロアでもこなせるものは、みんなが手分けしてやつてくれたし、私がやつたのはカウンター業務だけだ。これは私の仕事の一つなのだから、ねぎらつてもらうようなことじやない。気心の知れた同僚ならまだしも、他部署の方に気を遣われるのは気が引ける。私がそんな意味のことをやんわり告げると、彼はちょっと驚いたように目を見開き、次の瞬間声を

立てて笑つた。

「私、そんなに変なこと言つた？」

館花さんは、おろおろする私を覗き込むように、さらにこちらへ身を乗り出してきた。

……顔が近いです！ 反射的に身を引こうとしたけれど、椅子に阻まれて全然引けなかつた。

「あはは！ いいね。眞面目な子、好きだよ」

「へっ！」

がらりと変わつた口調に驚いた。急に辟け過ぎじゃありませんか。
それから、言われた言葉を頭の中で反芻して、ようやく意味を把握して……もの凄いパニックに陥つた。

「す、す、す！ な、じょ、冗談はやめてください！」

「冗談じゃないよ」

うろたえるのを通り越して明らかに挙動不審な私を、館花さんは面白そうに見つめている。
次は何を言われるのかとハラハラしたけれど、館花さんは何も言わない。ただ、機嫌良さそうにここにこと笑つてはいるだけ。

目の前にいるこの人は、いつたい誰なの？ そんな疑問が頭をよぎる。だって館花さんはいつも冷静で穏やかで、大人で。たまに怖いと思うことはあるけど、こんな風に子供っぽい人じやないでしよう？
沈黙が、つらい。耐えきれなくなつた私は、逃げる……じゃなくて、撤収することにした。

「……すみません。もう上に戻らないと仕事が」

「そつか。一日ここにいたんだもんな」

そう。そういうことです。これで館花さんも身を引いてくれるに違いない。いや、引いてもらわないと困る。

でも、私の予想と希望に反して、館花さんは動く気配がない。

「残業、何時までかかりそう？」

え？ 何でそんなこと訊くの？ そう質問したかつたけれど、気圧けおされてしまった。館花さんはいつも通りの柔軟な笑みを浮かべているが、その目には有無を言わせぬ迫力があつた。

「戻つてみないと何とも言えないですけど……多分、二時間半もあれば目処めどがつくと思います」

馬鹿か、私は！ 何で正直に話しかやうの！ と後悔しても、口から出た言葉は引っ込められない。

「今から一時間半というと、七時半か。まあ俺の方も……うーん。何とかなる、かな」

館花さんは遠い目をしながら何か思索している。よく分からなければ、何となく嫌な予感がする。

こういう時はあまり深く関わらないに限る。そんな気がする。——上に戻ろう。

手の中のカフェオレに目を落とした。これはもらえませんなどと押し問答をするのも大人げない。素直にいただきなおこう。

「カフェオレ、ありがとうございました。あまり時間もありませんし、これで失礼します」

足元に置いたバッグを手に、カウンターを出た。そしてもう一度、館花さんに向かって一礼した。返事を待たず、エレベーター脇の非常階段へ向かう。

緊張から解放され、私は安堵あんどののため息をついた。なぜ館花さんみたいな人が、私なんかに話し掛けてきたのだろう？ それも差し入れまで。からかわれたのかな？ うん。きっとそうだ。そうに違いない。期待したらダメ。身の程知らずなことは考えちゃいけない。傷つくのは怖いし、みじめな思いなんてしたくないもの。胸の奥をチクリと刺す痛みは全部無視して、自分自身に言い聞かせた。ああいう完璧な人は、遠くから見ているだけでいい。それ以上踏み込みたくないし、踏み込まれたくもない。そもそも住む世界が違うのだから。

背後から、女子社員たちが黄色い声で館花さんを呼ぶのが聞こえた。ここで働いていれば、何度も目に見る光景だ。華やかな子たちに囲まれて、その中心で彼は何を思っているのだろう？ ふとそんな疑問が頭に浮かんだけれど、すぐに振り払った。私には関係のないこと、だ。

定時で帰宅する社員が一斉に使用するので、終業時刻直後はエレベーターが混雑する。受付から総務課までは大した距離じゃないので、階段で上がった方が断然早い。だから私は迷わず非常階段を選んだ。

たまたま仕事を早く片付けたいっていう気持ちもあつたけれど、とにかく早くいつもの場所に戻りたかった。今日は色々なことがあり過ぎた。

非常階段は暖房がない分、フロアよりも気温が低い。普段、だつたらすぐに寒くなるけれど、暖房にのぼせた頬ほほにはとても心地良かつた。

ちよつと立ち止まって、螺旋階段の上を仰いでみた。手すりがカーブを描きながら上へ上へと伸

びている。どこまでも続いて天まで達するような錯覚を起こし、眩暈^{めまい}を覚えた。この不思議な感覚は嫌いじゃない。そういうえば、映画でもこういうシーンがあつたなあ。あ、あれは螺旋階段の上から下を見下ろす構図だつたつけ？ そんなことをぼんやり思った。

構造上仕方ないことだけれど、非常階段は音がよく響く。各階のざわめきが手に取るように伝わってきた。帰りを急ぐ人はみんなにたくさんいるのに、誰も階段を使おうとしないことに気づいて、ちよつと笑つた。みんなきっと、ここが寒いのを知つてているのだろう。あるいは、できるだけ余計な運動をしたくないのかもしれない。

一日の仕事を終えて帰路につく人々の声は明るく弾んでいる。一瞬『いいなあ』って思ったけど、よく考えてみれば、私はこのあと特に予定もないし、家に帰つて、ご飯食べて、適当にゴロゴロして、時間が来たら寝るだけだ。急いで帰つても、別にいいことなんかありはしないのだ。

「へえ。エレベーターじゃなくて階段？」

「——っ!!」

背後から、それも、ものすごく近くから声が聞こえた。かろうじて悲鳴は呑み込んだけど、かなりびっくりした。私は片足を最初の段に乗せたままの微妙な姿勢で硬直する。

この声は！ 顔を見なくとも分かる。だつて今の今まで聞いていた声だもの。

「た、館花さん？ どうしてここに!?」

かつん と高い靴音をさせながら、館花さんは私の前に回り込んできた。そして通せんぼでもするよう、右手を手すりにつく。何を!?

「まだ話の途中だつたんだけど」

もの凄く爽やかな笑顔でやんわりと咎められた。

「こ、ごめんなさい！」

失礼なことをしたという自覚はある。唐突すぎる展開に怖くなつたから逃げたなんてことは、やっぱり言い訳にならないので、慌てて頭を下げた。

「本当に君は面白いね」

おつしやる意味が分かりません。

「うん。君みたいに生真面目な子つて珍しいよね」

珍獣扱いですか。

「というわけで。もし迷惑じゃなかつたら、後でご飯でも食べに行かない？」

はい!! 何ですか、いきなり。

「お誘いいたく理由がありません。申し訳あります……」

「理由？ そんなものいるの？」

断わろうとする私を、館花さんは強引に遮つた。

「じやあそудだな。君に興味があるからもつと話したい。これつて君の言う『理由』にならないかな？」

「興味？ 館花さんが私に？ 笑えない冗談はやめて欲しい。」

「手を」

「え？」

「手をどけてください。通れません」
館花さんを睨むように見上げた。それがよほど意外だったのか、彼は目を見開いて私を見下ろした。
「もう充分からかつたでしよう？」

「からかう？ 僕が？」

館花さんは眉をひそめた。その不本意そうな顔は本気ですか？ それとも演技？

「そうです。もうこのくらいでやめていただけませんか？ ——失礼します」

「ちょっと待つて。どうしてそういう話になるの？」

館花さんは手すりから手を離さない。焦れた私は彼の横をすり抜けた。

「待つて」

呼び止められたけれど、そのまま一気に三階まで駆け上がった。

一度足を休めて耳をすましてみても、追つて来るような足音は聞こえなかつた。私はほつと胸をなでおろし、総務部フロアへ続く扉を開けた。いつも通りの喧騒に包まれて、やつと肩の力が抜ける。

「仕事、しなきゃ」

そう呟いて自分の席へ向かつた。

館花さんのことは忘れよう。私にとつては大事件だつたけど、彼には単なる気まぐれだつたに違いない。いつも彼を取り巻いている綺麗な女性たちとはちよつと毛色が違う、ドジな私が物珍しかつただけ。そう。深く考えても、何の意味もないことだ。さつきは少し言い過ぎたかなとは思うけど、

今さら改まつて謝罪する気は起きない。

昔から私は、見目の良い人や頭の切れる人、エネルギーに溢れた人と接するのが苦手だ。我ながら情けないとと思うけど、気後れしてしまうのだ。勢いに呑まれてしまつて、自分が自分でなくなる気がするから。眩しい光は目を焼く。つまり、そういうことだ。

館花さんは間違なく眩しい光を放つ側の人。これ以上、彼とは関わりたくない。あの色素の薄い目で見つめられると、胸がざわざわしてとても居心地が悪い。

もともと、彼は業務上あまり接点がない人だ。受付を任せられている間は多少顔を合わせる機会があるかもしれないけど、それさえ終われば滅多に顔を合わせることもない。——あと数日の辛抱。そう自分に言い聞かせた。

いつまでもぼさつとしているわけにはいかない。私は気を取り直して自分の机の上を見た。

「あ、ははは……」

思わず乾いた笑いが漏れたのも、やむを得ない。だつて。

何なの、この書類の山は!!

翌朝。

私は普段より早めに出社して、できる限り急いでルーティンワークを終わらせた。そして、昨日とほぼ同じ時刻に受付業務に就いた。

昨日よりもっと頑張ろう。

けれど——次の瞬間、全部放り投げて逃げ出したくなつた。

なぜ。一体なぜ、あなたがそこにいるのですか!?

受付のカウンターにもたれるようにして、館花さんが外の景色を眺めている。差し込む朝日が、彼の輪郭をキラキラと縁取っていて、思わず見惚れた。こういう光景を『一枚の絵画のような』って言うのだと思う。一切の表情を消した彼の横顔は氷のように冷たくて、そしてどこか寂しそうな色を宿していた。私は視線を外すことも、声を掛けることもできなくて、ただじっと見つめていた。そうしていた時間はそんなに長くなかったと思う。私の視線を感じたのか、館花さんがゆっくりとこちらを振り向いた。

凍てつく視線とぶつかつた。ぞくり、と背筋が寒くなり、思わず息を呑んだ。

次の瞬間、彼は今までの冷ややかさを打ち消すように微笑む。

「おはよう」

「……おはようございます」

私は夢から覚めたような心地で挨拶を返した。が、昨日のことが頭をよぎる。そうだ。のほほんと挨拶をしている場合じゃなかつた。

身を起こした館花さんは、迷いのない足取りで私の方へ向かって来る。叱られるのか、なじられるのか、それとも昨日以上にからかわれるのか……

「昨日はごめん」

「え?」

私は、一瞬何が起つたのか分からなかつた。

「昨日は少しばしあが過ぎた。反省している」

「はしゃぎ過ぎ? 一体何を……」

昨日から何度も思つてるんだけど、私、この人の話の展開についていけない。

君のことは前から気になつていた。で、実際話してみたら予想以上に面白くて、つい調子に乗つてしまつた

面白いって、褒め言葉なの? 素直に喜べない。

君をからかうつもりはまったくなかつた。でも、俺の態度が君を不快にさせたのなら本当に申し訳ない

「は、はあ……」

どう答えたらいいのか分からなくて困つたけど、ふと素朴な疑問が浮かんだので聞いてみることにした。

「あの、前からつて……？」

「うん。感じのいい子だなって思つていた」

「ええ!?」

素つ頓狂な声をあげちゃつたけど、これは不可抗力。

「そんなにびっくりすることなの?」

心底不思議そうな面持ちで、館花さんが首をかしげた。

「私、そんなつもりは……」

しどろもどろで答えると、彼は困つたように小さく笑つた。

「だからだよ」

ますます分からなくて首を捻つた。館花さんはそれ以上答える気はないらしい。無言のまま、不思議な微笑を浮かべているだけだ。

会話が途絶えると、ますます居心地が悪くなつた。じつと見つめられることに慣れていないので、落ち着かない。

もう話すことがないなら、そろそろ仕事に取り掛かりたいんだけどな。どう切り出したら良いのだろう?

「昨日の今日でこんなこと言うと、また君に嫌われるかもしれないけど」

私が口を開くより先に、彼はそう切り出した。

「嫌つてなんて……」

反論しようとする私を遮つて、彼は先を続けた。

「改めて、君を夕食に誘いたい」

えつ? あれ本気だつたの!?

私が何も答えずにいると、館花さんは困り顔で眉尻(まゆじり)を下げた。

純粹に君ともつと話をしたいだけ。だから、さ。友達として夕食につきあつてくれないか?』

「それは……」

「今日も七時半ぐらいには終わりそう?」

「た、たぶん」

ああ、私の馬鹿。何で毎回毎回正直に答えるの!

「じゃあ、さ。七時四十五分頃ここで待ち合わせ、でどうかな? それだと忙しい? 大丈夫?」

「私、着替(きがき)えにそれほど時間かからないので……」

いや、そうじゃなくて!

「じゃあ、決まりね」

それだけ言うと、館花さんは時間だからと踵(きびす)を返した。まずい。ちゃんと断わらなきや。

「あの! 待つてください!」

去つていく背中に、思い切つて声を掛けた。彼は足を止めてゆっくりと振り向く。そして話の先

を促すように軽く首をかしげた。

けれど私は言葉を繰ぐことができない。何度も口を開きかけてはまたつぐむ私を、彼は根気よく待ってくれている。

口下手なのだから、下手に言葉を選んだりしないで、「ごめんなさい。行けません」と、ただそれだけ言えばいい。頭ではそう分かっている。

なのに。嫌われたくない、少しでも良く思われたいという気持ちが心の片隅にあって、それが邪魔をする。断わりたいのに、声が喉に詰まつて喋れない。

穏やかな眼差しでじっと見ていた館花さんは、私が何を言いたいのか察したのだと思う。

「楽しみにしてる」

私の言葉を封じるように鮮やかに笑った。自信に満ちた笑顔に見惚れながら、私は退路を断たれたことを悟った。もしかしたら、私は自ら退路を断つたのかもしれない。

去っていく彼の背中を呆然と眺めながら、私はため息をひとつついた。

彼の誘いを断わるべきかどうか悩み続けた。けれど良い案は浮かばず、断わる勇気も機会も持てないまま一日が終わつた。

結局。私は今、こうして館花さんと差し向かいてテープルについている。

間接照明で彩られた落ち着きのある店内に、綺麗な旋律のピアノ曲がごく小さい音量で流れていって、耳に心地良い。こぢんまりとした店だった。

いわゆるダイニング・カフェっていうのかな?『リフージョ』という名のこのお店を、私は一眼で気に入った。女友達と来たなら、かなりリラックスできただろう。

けどね。

け、ど、ね。

今日は館花さんと一緒に。

私はちらりと彼を盗み見た。気づかれないように見たつもりだったのに、ばつちり目が合つてしまつた。あわてて俯いたけれど、彼の視線が私に向かつたままのが感じられて、顔が熱い。冷静に考えてみたら、そりや真向かいに座つてているのだから目だつて合うでしょう、って話なのだけど、完全に舞い上がつている私には、そんなこと思いつきもしなかつた。

俯いてばかりいるのは失礼だという気がするし、だからと言つて館花さんの視線を堂々と受け止める度胸もない。いたたまれなくなつて、さも内装に興味がありますといつたふうに、店内をきよろきよろ見まわした。

「そんなに面白い?」

館花さんがくすりと笑つた。声につられて目線を真正面に向けてしまい、その笑顔をまともに見る羽目になつた。威力抜群過ぎて、眩しい。

顔もまともに見られないのに、これから一緒に食事をするなんて無理です。何かの拷問ですか、これは。

戸惑つた私はなんとなく、テーブルの上で組まれた彼の手を見つめていた。

「初めてのお店なので……。ごめんなさい。見苦しい真似を……」

「謝らなくて良いよ。良い店でしょう？　ここ」

館花さんが自分のことのように誇らしげに言った。それが意外と子供っぽくて、私は初めて緊張がほぐれた。……ほんのちよつとだけ。

「はい！　とても素敵なお店ですね」

お世辞なんかじやなくて、本当にそう思う。

「気に入つてもらえて嬉しいよ」

組んだ手を解いて頬杖(ほおづえ)をついた館花さんは、満足そうに目を細めた。そのやや崩した姿勢に、とつもない色氣を漂わせている。心臓がどきりと跳ねて痛かつた。目を逸らそうとするのに、体が言うことを聞かない。無言でこちらを見つめている館花さんの瞳の力強さに魅入られた。

——どうしよう。目が、逸らせない。

「リフージョつて、どういう意味でしよう？」

沈黙が痛くて、苦し紛れにした質問だった。本気で答えが欲しかったわけじゃない。

「隠れ家、という意味ですよ」

思いもよらぬ方向から穏やかな声が届いた。声のした方を向くと、品の良いスーツに身を包んだ男性が立っている。誰だろう？　と私が首をかしげるより先に、館花さんが懶然とした口調で男性に話し掛けていた。

「何だよ、いたのか」

「いたのかはないだろう、和司。最近姿を見せないつて、スタッフみんな心配してたぞ？」

「ああ、仕事が忙しくてさ」

館花さんは照れくさそうに笑つた。その笑顔は会社で見るのとは全然違つていて、申し訳ないけど可愛いと思つてしまつた。

館花さんたちの様子からすると、かなり親しい仲のようだ。じゃれあうような会話を聞きつつ、私は小さく噴き出してしまつた。二人が、私の方を見る。

「こ、ごめんなさい！　お二人がとても楽しそうで……」

慌てて謝ると、館花さんは、男性を横目で睨(にら)んだ。

「俊兄(しゅんにゆき)のせいで笑われた」

「お前が子供っぽいからだろ。人のせいにするな」

しつとと言い放つた男性は、私の方に向き直つてにつこりと微笑んだ。館花さんに負けず劣らず整つた顔立ちで、どことなく雰囲気も似ている。

「ようこそいらっしゃいました。私はこの店のオーナーで館花俊一(じゅんいち)と申します」

「ちばな？」

「従兄(いとこ)なんだ」

館花さんがぶっきらぼうだけど、どこか誇らしげに教えてくれた。ああ。そつか。館花さんはこの方がことが大好きなんだ。だからさつきも……

そしてどことなく雰囲気が似ていると思ったのも、思い過ごしじやなかつたのね。

「道理で！」

「何が？」

私が一人で納得していると、館花さんが不思議そうに問い合わせてきた。

「似てると思って」

「似てません」

ほぼ同時に同じ答えが返ってきた。それがまたおかしくて。二人には申し訳ないけれど、また噴き出してしまった。

苦労しながら笑いを収め、私はオーナーの俊一さんに向かって簡単に自己紹介をした。口下手な私を見かねて館花さんがフォローしてくれるけれど、お世辞が多過ぎるので、私は冷や汗をかきっぱなし。

そんな私を尻目に、話題はいつしか料理のことへ移っていた。嫌いなものは、と訊かれたので、ないと答えた。それだけで注文完了。今日のお勧め食材をふんだんに使った料理を、お任せで作つてもらえるらしい。

「絶対にご満足いただけるものをお持ちしますので、お楽しみに」

オーナーはそう言つて笑つた。誇らしげで、自信に満ちていて……輝いて見えた。

「あの人に任せておけば絶対に間違はないから、さ。料理が来るのを楽しみにしてて？」

オーナーが去ると、館花さんが太鼓判をおした。本人の前では、素っ気ない言い方だつたのに。

私は胸の奥がじんわりと温かくなつた。

「大好きなんですね」

「あの人は俺の憧れだから」

館花さんははにかみながら、すんなりと認めた。照れ隠しで「違う」と言うと思った私は少し驚いた。その後は、驚くほど会話が弾んだ。会社のこと……と言つても当たり障りのない話題だけど。それから趣味のこと、家族のこと。最初の気づまりが嘘のように、他愛もない話を次々として。気がつけば料理もデザートも終えていた。

会つてまだ間もない人（正確には、話すようになつてから間もない人、かな？）と、こんなに打ち解けたのは初めてのことだと思う。館花さんは、とても優しい。そして時々少年のようになる。私は、彼の新しい魅力をたくさん知つた。だから、ますます不思議に思う。どうして私なんかに構うのだろう？　と。

その疑問は胸に刺さる小さな棘になつた。普段は痛みを感じない。だけど、事ある毎にちくりと痛む。そんな、小さな、小さな、棘——

「遅くなつたら危ないでしょ？」

そう主張して譲らない館花さんに急かされるように店を出た。

もうすぐ三月だというのに、寒さは少しも緩む気配がない。私はマフラーに顔を埋め、肩を竦めた。寒風にさらされる頬がびりびりと痛む。隣を歩く館花さんは、寒さなど感じていなかのよう

に、背筋をぴんと伸ばしている。颯爽とした館花さんと、もこもこに着ぶくれたちんちくりんの私。他人の目にどう映っているのだろう？

歩きながら、館花さんの横顔から目が離せなくなつた。

「俺の顔に何かついてる？」

そう訊かれて慌てて首を振つた。ぎこちなく前を向くと、隣から小さく笑う声が聞こえた。そして、その声がこう問い合わせてくる。

「佐々木さんは、つきあつてる人いるの？」

「はい!? なつ！ わ！」

急に変なこと言わないでください！ 動搖してつまずきそうになつた私の腕を館花さんが掴んで支えてくれた。

「——つと！ 大丈夫だった？ 暗いから気をつけて」

支えてもらわなかつたら、思い切り転んでいた。私はほつと息をつき、「ありがとうございます」とお礼を言つた。

「佐々木さんって……」

そそつかしい、つて言いたいんですか？ 誰のせいですか。誰の！

「思つていたより可愛い」

え？ 思いもよらない答えが返つて来て、私は固まつた。見る間に顔が火照る。今もの凄く真つかを迷つてているような声で言つた。

「いや、何でもない。ごめんね。——さあ、急ごうか？」
脇ふに落ちなかつたけれど、それ以上は訊けなかつた。

視線を逸らした。

「ねえ……」

と館花さんが何かを言ひかけた。何だろう？ 視線を戻した私に、館花さんは困つたような、何かを迷つてているような声で言つた。

「いや、何でもない。ごめんね。——さあ、急ごうか？」
脇ふに落ちなかつたけれど、それ以上は訊けなかつた。

世間話を続けるうちに駅に着いた。そこはいつも通りの喧騒に包まれている。終電までまだ間があるので、これでも静かな方だ。

館花さんにどの路線なのかと訊くと、私のとは違つていた。改札を入つたらお別れね、と少し寂しく思つていたら……

この時間は酔っ払いも多いからね。佐々木さんがそんなのに絡まれたら大変でしょう？ 電車が来るまで一緒に待つよ

いや、私なんかに絡む物好きはいないと思うのだけど。そう言うと、館花さんはぎゅっと眉間に皺を寄せて怖い顔をした。

「分かつてないなあ。そんな風だから心配なの」

結局押し切られるような形で、見送つてもらうことになつた。いつもならほんの一、一分でも長く感じる待ち時間が、今日はあつという間。電車が来るの、もう少し遅くても良かつたのに。私の

そんな思いをよそに、電車到着のアナウンスが流れてきた。

周囲の音にかき消されてしまわないよう、少し大きな声でお礼を言った。

「今日はありがとうございました」

「こちらこそ。楽しかったよ」

到着した車両に、ぞろぞろと人が乗り込む。私は列の最後尾に並んで、順番を待つた。のろのろと動く列に合わせて、ゆっくりと前に詰める。

「やっぱり後悔したくないから言うね」

私の斜め後ろに寄り添うように立っていた館花さんが、ぽつりと漏らした。

「何だろう？」と思う間もなく……

「ねえ、佐々木さん。俺とつきあって」

耳元で、そうささやかれた。

「え……？」

館花さんの言っていることの意味が分からず——というよりも、頭が理解することを拒否して——慌てて振り返った。私の肩すれすれに館花さんの顔がある。

ち、近いっ！ 思わず飛び退こうとしたけど、いつの間にか腕を掴まれていて動けない。

「ほら。乗り遅れちゃうよ？」

いや、そうじやなくて！

「返事はまた今度。ね？」

硬直している私の腕を引いて、事もなげに電車に押し込む。驚きのあまり呆然とする私とは対照的に、彼は平然と微笑んでいる。軽く手を振るその姿は、非の打ちどころもなく格好いい。私の後ろに立っている女性たちが「あの人力ツコ良くない!?」なんてささやき合っているのが聞こえた。
——そうよ。あんなに格好いい彼が私に「つきあって」なんて言うわけない。きっと聞き違いただ。思考回路がショート寸前の私は、見知らぬ女性たちのささやきを根拠に、そう結論づけた。
それにも、棘のある視線がチクチクと背中に刺さるのは何故でしょうか？ ——って、答えは決まってる。私みたいな十人並みが、館花さんみたいなイケメンに笑顔で手を振られたら、おかしいですよね、違和感だらけですよね。

今夜は楽しかったけれど、それは館花さんの話術や気配りのおかげ。私はただおろおろしてばかりだった。今ごろ館花さんは、予想以上につまらない女だと呆れているんじゃないかな。電車が来るまでつきあつてくれたのは、ただ単に優しいから。それだけ。

——きっと私、無意識のうちに『彼とつきあいたい』なんて身の程知らずなことを考えたんだわ。だからあんな恥ずかしい聞き違いをしたに決まってる！ 一度はそう思つてみたものの、彼の姿を見ると、また少しづつ期待が膨らんでしまう。
耳が痛くなるような大音量で発車ベルが鳴り響いた。目の前でドアが閉まる。その向こう側で館花さんが口を動かした。

『おやすみ』

端整な唇がそう告げている。そして彼は、艶をたっぷり含んだ顔で笑つた。声は聞こえなかつた

けど、耳元でささやかれたように感じて、頬がかつと熱くなつた。うるさいくらい心臓が早鐘を打ち、息が上手くできない。本当に館花さんの笑顔は破壊力抜群だ。今の今まで悩んでいたことが、いつの間にか全部吹き飛んでしまつた。

ゆつくりと電車が動き出し、館花さんの姿はあつという間に視界から消えていった。外の暗さのせいで鏡のようになつたドアガラスに、ぽかんと口を開けたままのマヌケな自分の顔が映るけど、そんなことを気にする余裕なんてない。

今夜私の身に起きたことは現実なのだろうか？ それともこれは全部夢か幻？ 正常な思考すら彼方に吹き飛んだ私は、ただ呆然と電車に揺られていた。

とんでもない一夜だつて、時が経てば朝になる。衝撃だつて、日が経てば薄れる。館花さんからはその後何の音沙汰もなく、あれはやつぱり冗談だつたのだと確信した頃……

受付の二人が無事復帰したので、私は通常業務に戻つた。
病み上がりとは思えないほど、溌剌とした美貌を見せる吉成さんと加瀬さんに、もの凄い勢いで謝られた。気にならないで欲しいと言つたのに、「それでは気が済まないから」と結局ランチをご馳走になる約束をした。それから、次またこういうことがあつた時のためにと、メールアドレスを交換させてもらつた。高嶺の花のような方々だと思つていたお一人だけど、実は意外と気さくで飾らない性格らしい。私も萎縮してないで、もっと早くからおしゃべりすれば良かつた。
そうやつて私は日常に戻つた。

そう。私はそう思つていたのだ。

少なくとも週明けの月曜日までは。

3

月曜日は、三月初めとは思えないくらい暖かい日になつた。

朝出がけに見た天気予報では、四月中旬の陽気だと言つていたから、屋上に上がつたらきっと気持ちいいだろうと思い、昼休みはお弁当を持って向かつた。

「気持ちいい！」

暖かい風が吹いていた。春の匂いのする風は、気持ちを浮き立たせてくれる。

社員なら誰でも屋上に出ることができるけれど、活用する人はほとんどいない。お昼は社員食堂や、近くのお店に食べに行く人が多いから。今日もこんなにいい天気なのに、誰もいない。貸し切り状態だ。私は一番眺めの良いベンチに座つてのんびりとお弁当を食べた。

空になつたお弁当箱をしまつて、食後の一眼よろしくペットボトルの緑茶をちびちびと飲む。心地よい風に吹かれて、景色を眺めて、ゆつくりと過ごす時間はなんて贅沢なのだろう。「楽しそうだね、佐々木さん」

突然、背後から声が掛かつた。

「——つ!! ゲホ!! ゴホ!!」

お約束過ぎて情けないけど、盛大にむせた。けれど、むせる苦しさよりも動搖が先に立つ。気まずい。非常に気まずい。

「大丈夫?」

館花さんが心配そうに眉根を寄せ、私の顔を覗き込む。

「だ、大丈夫、です」

赤くなっているのを見られたくなくて、顔をそむけた。視界の端で館花さんがふつと笑った気配がする。動搖を見透かされているようだつた。逃げ出したい。私はそつと荷物を片付け始めた。

「隣、いい?」

——困ります。ダメです。無理です。座らないでください。私のことは存在ごと忘れてください。

心中でそう叫ぶけど、口から転がり出た言葉は……

「どうぞ」

ああ、なんてこと言うの!!

「じゃあ、遠慮なく」

間に一人分のスペースを空けて、館花さんがベンチに座る。

続いて何を言われるのかと、私は身を固くした。けれど、彼は何もしゃべらない。不思議に思つて目を向けると、彼は静かな表情で景色を眺めている。少し長めの前髪が、さらりさらりと風になびく。

やつぱり綺麗。男性に向かつて綺麗なんて言つたら失礼かもしねいけれど、それ以外にぴつたりの言葉を知らない。仕事中の館花さんはいつも冷静で、穏やかな微笑を浮かべていて、時折見せる怜俐な顔も含めて、いかにも有能という雰囲気。親しみやすいのに、それ以上踏み込んじやいけない雰囲気も醸し出している。

先週の夜、垣間見たプライベートの館花さんは屈託がなくて、時には子供のようで、そして少しだけ危険な香りがした。

今、私の横にいる館花さんは、そのどれでもない館花さんだ。穏やかな顔の下で、彼は何を考えているのだろう? そして、この人はいくつの顔を持っているのだろう?

逃げたいと思っていたはずなのに、いつの間にか館花さんのことを考えていた。彼のことをもう少し知つてみたい。だけど、危険。この人は危険だ——。本能がそう告げている。相反する二つの気持ちが心の中で暴れる。

私はぎゅっと目をつぶつて誘惑に耐えた。やつぱりこの人に近寄つたら駄目だ。彼にどう思われてもいいから、これ以上関わるのはやめよう。

「この前、俺が言ったこと、考えててくれた?」

仕事場に戻ろうと立ち上がつた私を引き留めるようなタイミングで、館花さんが口を開いた。

「え? この前?」

悪あがきだとは思つたけど、とぼけてみた。

「俺どつきあって、つて言つたでしょ?」

やつぱりあれは空耳でも間違いでも勘違いでもないのですね。

「館花さん。冗談はよしてください」

「冗談なんかじゃない。だから……」

私の手首を、館花さんが掴んだ。その瞳は怖いくらい真剣だった。これ以上聞きたくない。ううん、聞いたやダメ。

なのに、私は彼の手を振りほどくのも忘れて、瞳を見つめ返していた。怖いと思いながらも、彼の眼差しに惹かれていた。吸いこまれそうなほど澄んだ瞳の中に、戸惑う私の顔が映っている。

「君の返事を——聞きたい」

決して大きくはないその声が、私の耳から流れ込み、まるで麻薬のように甘く脳を痺れさせた。手首から伝わって来る彼の熱が、じりじりと胸を締めつける。

彼の手は大きくて力強い。今さらながら彼の——男性の力の強さに驚く。こんな風に誰かに手首を掴まれる経験なんてなかったから、逃げられないことが本当に怖いものだと全然知らなかつた。

彼に惹かれる心と、不安と、圧倒的な力の差に対する怖れ。色々な感情が複雑に絡み合いながら、私の体を走り抜けた。

「手を離してください」

自分でも驚くくらい声が掠れてしまつた。

「君が答えてくれたら、ね」

口の端を歪めて、館花さんが笑う。拒まれるなど考えていないような自信に満ちた顔。

どうしてこの人は私なんかに構うのだろう?
「ごめんなさい。おつきあいはできません」
「どうして?」

不思議そうに訊かれて、言葉に詰まつた。「あなたが信じられないから」「冗談としか思えないから」そんな風に答えたら怒る? それとも、案外鋭いんだな、と嘲笑う?
「答えられないなら、OKってことでいいね?」

そんな強引な! 私は信じられない思いで、彼の顔をまじまじと見つめた。
「だってそうでしょ? つきあつているやつがいるなら、そう言えば済むし、俺のこと嫌いなら即座に断わるはずだ。何も言わないくつてことは、迷つてているから。だろ?」
「違いますっ!」

「そう? なら俺を納得させてみてよ。じゃないと引かない」

彼の目がすっと細まつた。突き刺さる視線が痛い。掴まれた手首も熱くて火傷しそうだ。

これ以上館花さんに近づいて傷つくるのが怖いんだもの! 断わる以外に選択肢はないでしょ? 親しくなつた後、館花さんが私に飽きたら? もう要らないって言われたら? きっと立ち直れないくらい大きな傷を負う。もつと魅力のある女性だったら、彼の気持ちを繋ぎ止めることができるかもしれない。けれど、私は? 彼に飽きた時、何の取り柄もない私に何ができるって言うの? 今なら傷は浅くて済む。深く傷つく前に、全部なかつたことにしてしまいたい。その方が辛くないもの。

なのに……。これじや、諦めようと思う気持ちが揺らいでしまう。

「私、館花さんのことよく知りませんから」

「なら、これから知つてよ。俺だって君のこともつと知りたい」

知つてしまつたら戻れない気がするから。知りたくありません。

「私みたいな平凡な女、あなたに釣り合いません」

釣り合うとか釣り合わないなんて馬鹿馬鹿しい。俺は君に興味があるし、君のことが気に入つて

いる。それじゃ駄目なの？」

その興味が消えるのが怖いから、私はこうして逃げようとしているのですが。

「私と一緒にいても楽しいことなんて一つもありませんよ!?」

「俺は楽しい」

「嘘！」

私の言うことを片つ端から否定していた館花さんが、疲れた様子でため息をついた。

「ねえ。こんな会話は馬鹿馬鹿しいと思わない？ 第一、こんなことぐらいじゃ諦めないよ、俺」
こんなに一生懸命説明しているのに。どうして分かつてくれないの？ 大いたい、どうしてあなたはそう下がるのですか。その気になれば、つきあう女性なんてよりどりみどりでしょう？
それなのに何故、こんなところでこんな風に私なんかを構うんですか！

「どうしたら諦めてくださるのですか？」

私はなかば自棄になつて尋ねた。

ここ数日の、この距離感はつら過ぎる。関わりのない位置まで戻つて、私のことなんて忘れて欲しい。

「君が本気で俺のこと嫌いになつたら、かな」

「なつ!?」

無理難題をふっかけないで。本気で嫌いになれるなら、こんなに困らない。答えに窮した私は唇を噛んで俯いた。もつと自分に自信が持てるような人間だつたら良かったのに……そんな不毛な願いが心に浮かぶ。

次の瞬間、手首を強く引っ張られた。

「きや!?」

突然の出来事に、私はあつけなくバランスを崩した。

ぶつかる！ 目をつぶつて身を固くしたけれど、予想した衝撃は襲つて来ない。その代わり、背

中に感じる力強い腕。続いて、くるりと体を回される感覺。そしてお尻に硬い板のような感触。一体何なの!?

恐る恐る目を開いた。あれ？ 私、立ち上がつたはずなのに、まだベンチに座つている。彼に腕を引つ張られてバランスを崩して、それでまたベンチに座り込むことになつたのね。ちょっと強引すぎない!? と少し腹が立つた。ムツとしながら顔を上げて……

「うえつ!?」

色氣も何もない悲鳴が口から漏れた。仕方ないじゃない。顔が触れるぐらい近くに、館花さんの

顔があつたんだもの。私に覆いかぶさるように、館花さんが立つてゐる。のけ反つて逃れようとしても、ベンチの背もたれが邪魔をしているのでできない。左右に逃げ場を求めてみたけれど、彼の腕が背もたれを掴んでいて——要するに、私は彼の腕に挟まれていて身動きがとれない。完全に囮い込まれた。

手首を掴まれた時に感じたのと同種の恐怖が鎌首をもたげた。それを悟られないように、目に力を込めて彼を見つめ返した。

「どいてください」

「ねえ。嫌いになるくらい俺のこと知つてよ？」

私の言葉を無視して、挑発的に笑う彼。口角をつり上げて笑うその不敵な表情に、私は目を奪われた。

「つきあう、つきあわないって話はもう止めだ。俺を知つて、その上で俺を嫌いになつてよ。そうしたら諦めてやるから」

彼は悪魔的な艶^{あや}を含んで低くささやく。普段の穏やかさをかなぐり捨てた淒みのある笑みと物言ひに、私は息を呑んだ。背中を冷たい汗が滴り落ちる。

「だから……さ」

「だから？」

私は上^うずつた声で彼の言葉を繰り返した。緊張のあまり、ごくりと喉が鳴つた。

「今週末、デートしよう」

今までの雰囲気が幻だったかのように、館花さんは爽やかに笑つた。

「はい!?

またしても間抜けな声を上げてしまつたけれど、これも不可抗力だ。そんな私を見て、館花さんはクスクスと笑つている。この人は！ どこまでが本気で、どこまでが冗談なの。

「館花さん！ 悪ふざけはよしてください！」

「ふざけてなんかいない。本気だよ」

そう言いながら、館花さんはあつさりと腕の団いを解いた。少しでも館花さんの顔から離れようとして、ほとんどベンチからずり落ちていた私は、急いで立ち上がりようと慌てる。けれど上手く立ち上がれない。じたばたする私を見かねて、館花さんが手を差し伸べてくれた。

「あ、ありがとうございます……」

その手につかまつて立ち上がりながら、もごもごとお礼を口にした。

「どういたしまして。君のそういう律義^{りぢぎ}などころ、好きだなあ。——ところで。何で君は後ずさつてるの？」

「え？ そ、そんなことありません……よ？」

仕方ないじやない！ また変な悪戯^{いたずら}されたら困るもの。

「そう？ ——逃げられると尚更追いかけたくなるんだけどねえ」

そんな物騒^{ぶつとう}なこと言わないでください！ 逃げてませんから！ 私は慌てて後ずさるのを止めた。一応、距離をとることはできたから大丈夫。よね？

警戒心も露わな私を見て、館花さんがくすりと笑った。

「それで逃げたつもり？」

そう言つた次の瞬間、私は強引に腰を抱かれて引き寄せられていた。スーツ越しに感じる彼の筋肉質な体。男性と密着したことがない私は、完全に思考停止状態だ。

「捕まえた」

笑いを含むささやきに何か反論したいと思つたけど、何を言つたらいいのか考えがまとまらない。顔を真っ赤にして「をばくばくさせる私を愉快そうに見下ろしていた館花さんは、それで気が済んだのか、私の腰から手を離した。

呆然とする私をよそに、館花さんは内ポケットから名刺を一枚取り出し、裏面にペンで何かを書き込むと、有無を言わさず私の手に押し付けた。

「俺の携帯の番号とアドレス。後でメールか電話くれる？」

ここで私の番号やアドレスを訊き出すことだつてできるのに、敢えて訊かずにいる。それは彼の優しさなのかもしれない、と私はぼんやりと思った。

「あ、忘れたふりして逃げるのはなし、だからね？」

最後はしつかり釘を刺された。やつぱり前言撤回。彼、優しくないかも！

その晩の私は、我ながら呆れるほど緊張しながら携帯を握りしめていた。

ねぇ、こういう時つて何を書けばいいの!? 男の人とプライベートなメールのやりとりなんて全

然したことないもん。分からぬよ！ 親しい友達に書く時みたいな文面だと失礼だよね？ 逆に、堅苦しくても失礼だつたりするのかなあ？ かと言つて、自分の携帯番号、アドレス、以上、終わり！ ……じゃさすがに素^そっ気なさ過ぎるよね。

私は文字を打つては消し、打つては消しを繰り返した。緊張し過ぎたせいで打ち間違いも多くて、余計に時間がかかつた。十分以上悩んで書けたのは『件名・佐々木です』だけ。うわ、我ながら情けない。

それからさらに二十分ほど悩んだ末……

『お疲れ様です。佐々木雪乃です。私の携帯番号とメールアドレスをお送りします』

ようやくそれだけ書けた。素つ気ないけど、変ではないよね？ これ以上考えたつて、気のきいた文章なんて思い浮かばないだろう。仕方ない。これを送ろう。

文末に番号とアドレスを貼り付けて、ただちに送信ボタンを押した。一瞬でも迷つたら、絶対に送信できなくなるから。

メール送信中のアニメーションを食い入るように見つめる。数秒で送信完了。

「ふわあああ」

気が抜けて、大きなため息が出た。私はお気に入りのクツーションに顔を埋めて、ぐりぐりと額を押しつけ、それからがばっと体を起こして、また沈んだ。

「メール、送っちゃつた……」

「ブー！ ブー！ ブー！」

今しがた放り出した携帯が、メール着信を告げている。フローリングの床に置いていたから、驚くほど大きな音がした。

「ひやあ！」

私は飛び上がった。慌てて携帯を手にとると、ディスプレイに表示されているのは館花さんの名前。へ、返事が、もう来ちゃつた！

読みたいような、読みたくないような複雑な気分。けど、読まないわけにはいかない。私は思い切つてメールを開いた。

『メールありがとう。こんなに早くもらえると思つてなかつたから嬉しかつた。土曜と日曜、どつちが暇？』

いきなり本題ですか!? というか、私、デートに行くつて言つた覚えはないのですけど!?

『本当に私でいいんですか?』

それだけ書いて送信したら、間髪容れずに着信。館花さん、返信、早過ぎませんか。

『いいに決まつていて。君だから誘つた。で、どつち?』

私が断わるとは露ほども思つていらないのね。随^{すい}分^{ぶん}と強氣、それに強引だなあ。でもね。悔しいけど私、館花さんとデートするのが少し楽しみになつてきてている。戸惑いはあるし、まだ彼のことを怖いと思う気持ちもある。けど、彼と話すのは嫌いじやない。ううん。正直に言えば楽しい。

『土曜日がいいです』

土日どつとも空^あいているけど、私は土曜日を指定した。一日でも先に延ばしたら、それだけ悩む

時間が増えるから。そんな簡単な理由。

それからしばらく館花さんとメールのやり取りをして、土曜日の行動予定を詰めていった。映画を観て、ご飯を食べる。デートコースとしては王道中の王道^{おうどう}だけど、私は内心ほつとしていた。映画を観終わつた後の食事なら、映画の感想を語り合つて盛り上^あがれると思うもの。話題に困ることもないはず。

『じゃあ、そういうことで。楽しみにしてる。おやすみ』

館花さんから何度目かのメールが届いた。

にっこり笑つて「逃げるなよ」って言つている館花さんが想像できて、私はちょっと笑つた。

『逃げませんから！ おやすみなさい』

と送信してから気がついた。逃げる、逃げないつていうのは、私の勝手な想像だつた!! もしかして『私も楽しみにしています』とか何とか書くべきだつた!! 『逃げない』なんて可愛くも何ともないよ！

『うわ！ やつちやつた！』

私はまたクッションに顔を埋めて、ぐりぐりして。そして、うーうー^{うな}唸つた。

送つちゃつたものは仕方ないと諦めて顔を起こした途端、またもメール着信。

『何だ。よく分かつていてる』

『……通じてる!? やつぱり逃げるなよつて意味がこもつていたのですか、さつきのメール。がつくり。どつと疲れて、私はテーブルに突つ伏した。目の前に置いた携帯をぼんやりと眺める。

「土曜日、何着てこうかな……」

少しでもいいから、館花さんの隣を歩いて恥ずかしくない格好がしたい、な。

4

デートまでの五日間。色々と思い悩むのではないかと思つていたけれど、急に仕事が忙しくなつたせいで、あつという間に過ぎていった。

そして気がつけば当日の朝。いつもよりちょっとだけ早起きした私は、クローゼットの扉をめいっぱい開けて悩んでいた。そう。ゆゆしき事態勃発。着ていく服が決まらない!!

台所から漂つて来る朝食の匂いが、余計に気持ちを焦らせる。

散々悩んだ末、私はちょっとだけ春っぽい服装に決めた。「例年より暖かい一日になるでしょう」つてテレビでつっこり笑っていた天気予報のお姉さんを信じて。

レースの丸襟えりがついた小花柄のシフォンワンピースの上に、大きなリボンのついた白いショート丈のスプリングコート。通勤の時とあまり変わらないような……? 何かもつと……なんて考えていると、台所から母の声が飛んできた。

「雪乃! 出かけるんでしょー? 早くご飯食べないと遅れるわよ!」

もうそんな時間!? 時計に目をやると、確かにちょっと危険な時刻。私は慌てて部屋を飛び出した。

大丈夫かな? 変じやないかな? 歩きながら、何度もショーウィンドウに映る自分の姿を確かめた。

ドキドキしながら待ち合わせ場所に着いたのは、約束の時間の十五分前。思つていたより早く着けた。少し早過ぎたかな。まだ館花さんは来ていないだろうと思つたけれど、念のため周りをざつと見まわしてみた。広場には、待ち合わせをしているらしい人たちが大勢集まっている。

その中の一人に、自然と目が惹きつけられた。人混みの中——しかも遠目なのに、それが誰なのか一目で分かつた。黒の細身のコートに、グレーのパンツ。シンプルな格好がその人によく似合つていて、彫の深い端整な顔立ちを際立させていた。日差しを受けて輝く栗色の髪がそよ風になびいている。

館花さんだつた。彼の前を通る女の子たちの多くが振り返るけれど、彼はそしらぬ顔だ。人を寄せつけない冷たい雰囲氣に気後れして、私は足を止めた。

待たせてはいけないと思うけれど、どう声を掛けたらいいのか分からない。あの凛とした空気を壊してはいけないんじやない? そんな気さえてくる。

館花さんが視線をこちらに向かた。当然のことだけど目が合つた。その瞬間、彼は驚いたように目を見開き、そして、とろけるように笑つた。ゆっくりと私の方へ歩いて来る。

「早かつたね、佐々木さん」

「お待たせしてごめんなさい」

立ち読みサンプルはここまで